

Yamaoka home care clinic
3rd Anniversary

やまおか在宅クリニック開院
(在宅医療・在宅緩和ケア専門クリニック)

3周年記念

1. 理念

“住み慣れた家で、その人らしく、今を生きる”患者と家族を支えます。

2. 基本方針

“安心と安らぎを与える在宅医療”を目指す

- 1) 苦しんでいる人、困っている人のために働く
- 2) どなたでも、だれからの依頼を断らない
- 3) いつでも(24時間365日)訪問診療します

3. キャッチフレーズ

“大分市(県)全体をホスピスに！”

Yamaoka home care clinic 3rd Anniversary

目次 CONTENTS

1	3周年記念に寄せて、寄稿	2
2	やまおか在宅クリニックの今日までと方針、チーム医療	8
3	やまおか在宅クリニックを紹介する記事	10
4	チームを組む医師、看護師、他職種や 一般の方からのお言葉	14
5	クリニックの日常風景	26
6	在宅患者さんのご家族の想い、ご遺族の想い	30
7	診療風景（御自宅の日常風景、クリスマスなど）	38
8	やまおか在宅クリニックのスタッフからのメッセージ、 “リレーフォーライフ in 大分”	44
9	特別記事・報告 （英国の緩和ケア視察研修、バングラデシュ医療活動、医学生研修）	52
10	やまおか在宅クリニックの活動報告と在宅診療実績	62
11	遺族調査	68
12	学会発表、講義講演	72
13	編集後記	77



3周年記念に寄せて、寄稿

- **「やまおか在宅クリニック 3周年を迎えて、感謝！」**
…………… 医療法人カーサミア やまおか在宅クリニック 院長 山岡 憲夫
- **「やまおか在宅クリニック」開院3周年 おめでとうございます！**
…………… 社会医療法人栄光会 栄光病院 理事長・ホスピス主監 下稲葉 康之 先生
- **「在宅ホスピスの仲間たちへ」**
…………… 医療法人 にのさかクリニック 院長 二ノ坂 保喜 先生
- **「やまおか在宅クリニック 3周年おめでとうございます」**
名古屋大学大学院医学系研究科看護学専攻 がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン
阿部 まゆみ 先生



やまおか在宅クリニック3周年を迎えて、感謝!

医療法人カーサミア やまおか在宅クリニック

院長 山岡 憲夫



当クリニックもお陰様で、在宅医療・在宅緩和ケア専門クリニックとして、大分市東大道に開院し、平成24年7月2日にて3周年を迎えました。

開院するに当たり、私と安土看護師長は共に、“病で苦しんでいるひと、困っているひとのために働く”という共通の志で、まず始めました。

“大分市（県）全体をホスピスに！”を合言葉に、

“住み慣れた家で、その人らしく、今を生きる”患者と家族を支えることを理念とし、“安心と安らぎを与える在宅医療”を目指してきました。

お陰様で、3年間に在宅患者653名、うち末期がん：在宅ホスピス患者392名を訪問診療させていただきました。

開院当初は1名の在宅患者しかいませんでしたので、私と安土師長も暇であろうと思っていました。しかし、開院直後から爆発的に多くの患者を紹介して頂き、在宅を希望する方がこんなにも多く居たことを再確認しました。それ以後も、継続的に多くの患者を紹介して頂き、この3年間、目まぐるしい日々が続いています。最初は4名であったスタッフも、今は10名と増え、看護師も4名になっています。

在宅の看取りも、少ないだろうと思っていましたが、3年間で317名（がん患者252名）を在宅で看取り、3年間で300名以上の方を在宅で看取っています。この1年間では122名とさらに在宅看取りも増加しています。がん患者さんが約80%ですが、超高齢者や呼吸不全、心不全、腎不全などの末期患者も20%もいました。

これは、多くの訪問看護ステーションの方々やケアマネジャーの方や、病院の地域連携室の方などを始め、ひとえに多くの皆様の支援のお蔭だところから感謝しています。

また、薬剤師の方（ブンゴヤ東大道店）も24時間常に待機して頂き、夜中に呼び出して麻薬を処方して頂いたことも幾度もありました。在宅医療はチーム医療・介護であり、多くの方の力添えには心から感謝しています。

この度、感謝の意を表すために、この3年間の在宅医療や活動内容などを含めて記念報告誌を企画しました。

さまざまの方からお言葉を頂き、感謝に耐えません。

今後とも、在宅医療・在宅緩和ケアの発展推進のために、今後とも頑張りたいと思っています。

ますますのご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。



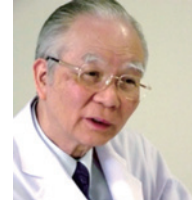
祝3周年をクリニックの仲間と



「やまおか在宅クリニック」開院3周年 おめでとうございます！

2012年8月1日 社会医療法人栄光会 栄光病院

理事長・ホスピス主監 下稲葉 康之



山岡憲夫先生始めスタッフの方々におかれては、あっと云う間の3年間でしたでしょうか？慌ただしく、しかし必ずや貴重な感動に富んだ3年間だったに違いありません。本当にご苦労さまでした。そして3年間のご愛労に天来の慰めをお祈りいたします。

私が先生とのお仕事に初めて接した時の感動はよく覚えています。もう10数年も前のことになりましょうか、「日本死の臨床研究会・九州支部研究集会」を先生が大分市で主宰されご講演をお聞きした時に、込み上げてくるものを禁じ得ませんでした。それは、患者さん・ご家族に対する先生の熱い思いやりの心とホスピスに対する静かな情熱を感じたからでありました。それ以来、ホスピスの力強い味方を得た思いです。

そしてこの度、先生が自ら立ち上げられたこの3年間の在宅クリニックのお働きで、本来目指されたものがしっかりと開花し実証されたように思います。3年間で訪問診療された患者さんが653名、在宅看取り総数317例と、ひとり医師のクリニックとしては実に驚異的な数字です。

そしてこの数字を支え裏付けるのが、先生の掲げる「基本理念」にあるのは確かです。即ち、「安心と安らぎを与える在宅医療を目指す ①苦しんでいる人、困っている人のために働く ②どなたでも、だれからの依頼も断らない ③いつでも(24時間・365日)訪問診察します」。

このような基本方針で進まれる先生とクリニックの使命は今後ますます貴重なものとなりましょう。患者さんとご家族の期待と要望は今後更に膨らみ、大分地区におけるホスピス緩和ケアの中心的な役割を必ずや成し遂げていかれることでしょう。

折しも日本は、どこの国も経験した事のないような超高齢社会を迎えます。当然、年間死亡者数も激増しますし、がんで亡くなる方々も1.5倍に増えると予測されています。そのような時代の到来を間近に控えて、政府厚労省も本腰を据えて在宅医療の施策を次から次へと打ち出しています。これから急速に在宅チーム医療の役割が大きく重くなっていきます。そのような意味においても、先生とそのクリニックに期待される任務は極めて大きなものがあると云えます。

これからもそのお働きは必ずや病める方々・ご家族の頼りとなり慰めとなり、大きな輪となって広がっていくことでしょう。

先生は在宅クリニックの多忙な業務に加えて、ホスピス緩和ケアの啓発活動に熱心に関与し指導してこられました。地元の「大分緩和ケアを考える会」代表を始め、「日本死の研究会九州支部」支部長や「NPO法人ホスピス緩和ケア協会九州支部」代表幹事など九州地区ホスピス緩和ケアの舵取り役の大任を一身に負っておられます。必ずや、ホスピスに対する捨て身のご熱意と苦しんでいる人を捨て置けない暖かいお人柄で、支部活動を今後更に牽引して頂けると確信しています。

ただ、そのご健康がこれからも支えられ強められますようにと祈ります。

改めて、先生を始めスタッフの方々に天来の慰めを祈り、今後の更なるご活躍を心から祈念いたします。



プロフィール

栄光病院副理事長・院長・ホスピス長

NPO法人栄光ホスピスセンター理事長・社会福祉法人援助会聖ヨゼフの園理事・評議員・

日本死の臨床研究会監事・世話人九州支部役員・日本ホスピス緩和ケア協会監事九州支部

代表・福岡大学医学部臨床教授・九州大学、久留米大学非常勤講師



在宅ホスピスの仲間たちへ



医療法人 へのさかクリニック

院長 二ノ坂 保喜 先生

大分をホスピスに！という壮大な夢を抱えて、在宅ホスピス仲間の山岡憲夫先生が大分の街を走り回っています。

私は長崎大学時代に山岡先生と一緒に仕事をしたことがありましたが、その後は大学を離れました。1996年福岡市で開業し、外来診療とともに在宅ケア、在宅ホスピスケアを行ってきました。200名ほどの在宅患者を抱え、年間100名ほどの在宅ホスピス患者を診ています。年間の看取りは7～80名ほどでしょうか。

日本のホスピス運動は今、曲がり角にきています。

1967年イギリスのセント・クリストファーに始まる世界のホスピス運動は、世界各地へ、そしてより広い疾患・すべての年代へとその対象を拡大してきました。1980年代から日本のホスピス運動は始まったのですが、当初からの施設偏重、がん偏重はいまでも続いています。世界保健機関WHOの定義にあるように、「生命を脅かす疾患・状態」のすべてがホスピスケアの対象であると考えべきでしょう。

2008年のがん対策基本法は、疾患の早期から緩和ケアを取り入れ、患者の生活の質の向上を謳ったという点では評価できますが、あくまでもがん患者に限定された緩和ケアという考えです。

幸いなことに、施設ホスピスと違って在宅では、疾患を限定していません。在宅では、がんであろうと、脳卒中であろうと、認知症であろうと、そのような病気をを持った「一人の人間＝生活者」として接します。その生活、人生、いのちを最後まで丁寧に支えるのが、在宅ホスピスの仕事です。

インド・ケララ州では「痛みと緩和ケア協会」というNGOが広い地域の緩和ケアのネットワークを作って活動していました。その活動は、市民の支援をベースにしたもので、疾患はもちろん、がんのみに限定したものではなく、痛み、苦しみのあるすべての人々を対象としていました。私はケララでの「緩和ケアにおけるコミュニティ参加をめぐる国際ワークショップ」参加のため、2004年に初めて訪問しました。インドのケララ州という、医療資源が乏しく、人々も大変貧しく（一人あたり所得は、日本やアメリカの100分の1）、医療保険も整備されていない地域で、人々の助け合いの仕組みが、痛みを苦しむ人々を支えるネットワークとして確実に機能しているのを見て、感銘を受けました。

また、私は、1989年から毎年バングラデシュを訪問しています。「バングラデシュと手をつなぐ会」という福岡のNGOのメンバーとして、バングラの農村カラムディ村での、教育、保健医療、生活向上の支援に取り組んでいます。毎年夏になると、現地を訪問して、現地のNGOのメンバーと活動を視察し、課題を話し合ったり、村人たちと交流したりします。一昨年の現地訪問には、やまおか在宅クリニックから、看護師の高山朋子さんが参加してくれました。初めてのカラムディ村でしたが、彼女はすぐにとけ込んで、汗を拭きながらさわやかな笑顔で村人や子供たちと接していま



バングラデシュを訪問



した。彼女の笑顔をみていて、クリニックの普段の様子がよくわかりました。講演などではいつも、思いがいっぱいであふれるように話す山岡先生ですが、その思いを彼女たちが共有し、支えているのだな、と感じます。

山岡先生は、大分の街だけでなく、日本の在宅ホスピスのリーダーの一人として、我が国の在宅ホスピスを引っ張っていく役割も自ら担っています。これからも大分を走りながら、日本の在宅ホスピスを引っ張っていただきたいと願っています。

そして、彼のバイタリティと思いが世界へ広がり、一緒にバンングラデシュ訪問ができる日を楽しみにしています。



高山看護師も参加（2011年8月）



オカリナを演奏する二ノ坂先生

二ノ坂 保喜先生の著書

「在宅ホスピスのススメ」（監修、木星舎）
「在宅ホスピス物語」（青海社）、2011年発行
「病院で死ぬのはもったいない」
〈いのち〉を受け止める新しい町へ
（山崎 章郎 著、二ノ坂 保喜 著、春秋社）



やまおか在宅クリニック3周年おめでとうございます

名古屋大学大学院医学系研究科看護学専攻
がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン

阿部 まゆみ



「やまおか在宅クリニック」3周年本当におめでとうございます。

振り返ってみますと私が山岡先生にお目にかかりましたきっかけは死の臨床研究会でした。当時より大分県内のホスピス開設に関わられ、ホスピスマインドを熱く語る先生のお姿がありました。この山岡先生が、地域に根ざす大分型ホスピスを実現されるに違いないと思っておりましたら、間もなく開業の挨拶状が届いたのです。

先生が目指される在宅ホスピスコンセプトを具体化するその日が来たのです。私はその間もなく、がんに罹患した親をもつ子どもさんのケアについてお話する機会をいただき、大分に出向くことになりました。会場に入りますと、そこには、若いお母さんと愛くるしい子どもさんを連れた方から医療関係者まで幅広い年代の方々が熱心にホスピスの話を聴かれていたことに驚きました。

2回目の大分訪問は、2011年の秋でした。私の在職する名古屋大学で取り組んでいるキャンパス型緩和ケア運営の関連で、住み慣れた我が家で最期まで過すことを決断された方々を訪ねる構想をいただき、山岡先生にお願いしたところ、一つ返事で快諾いただきました。

その1日は忘れられない貴重な日となりました。早朝から女性ドライバーさんの運転で山岡先生と看護師さんと一緒に訪問が始まりました。1軒1軒訪問させていただいた皆さんは、わが家でゆっくりと思いのままに過され、余裕さえ感じられました。

ある一人暮らしの女性は、早朝の目覚めは世界遺産に触れることから1日の始まりを迎えられていました。トマトゼリーを作るのが上手な奥さまとそのご主人は山岡先生の訪問を楽しみにされ弾むような会話が飛びかかっていました。

次いで、その時を迎えようとされている方の自宅に入ると、状態が変化をしたときの対応について娘さんとご主人に説明され、会ってもらいたい人には連絡をされるよう話されていました。すると、ご主人は何度か良くなったり、悪くなったりしたけど今度は難しいようだ・・とポツリと話されました。ご家族の日常の中でその時を迎える静かな時でした。訪問看護師さんとの打ち合わせのなかで、家族と一緒にできる限りその方が望まれているよう、ゆるやかな時を過せるよう配慮されていました。それはシンプルでした。また、使命感のもとに力の限りを尽くされているようでした。こうして大分の地で静かに在宅ホスピスの輪が広がりつつあることが実感できました。

このように山岡先生とクリニックスタッフの皆さままで温めてこられた‘大分市全体をホスピスに’をモットーに、地域に根ざした在宅ホスピス活動の広がりは、さらなる発展をされることを祈念いたします。



阿部先生と在宅往診同行
(2011年9月クリニックの前で)



阿部先生と木野村、高山看護師との
イギリス緩和研修(2010年12月)